

麻布一本松狩野家資料とその周辺

齋藤 真麻理

*キーワード

狩野派・粉本・麻布一本松家・ハリス・ヒュースケン

た江戸城障壁画や、幕末に加速した欧米諸国への贈呈屏風に関わる粉本等も伝えられるなど、御用絵師の実態把握のみならず、この時代の海外交流史を考える上でも有益な資料である。

二〇二一年度から二〇二三年度にかけて、東京藝術大学大学美術館に所蔵される「麻布一本松狩野家資料」三七五点（東洋画真蹟^①）が国書データベースに加わった^②。麻布一本松家は、狩野永徳（天文十二年・一五四三）天正十八年・一五九〇）の実弟である狩野長信（天正五年・一五七七）承応三年・一六五四）の三男、休圓清信（寛永四年・一六二七）元禄十六年・一七〇三）を祖とする表絵師の家系である。幕府の御用絵師として活動する一方、南部藩や盛岡藩との交流も密であったことが知られている。

同コレクションは、本家筋に当たる御徒士町狩野家の後裔、狩野うめ氏から昭和二十二年に寄贈された。麻布一本松家由来の粉本などの絵画資料、御用日記、由緒書などから成る。同家の絵師たちが制作に携わっ

周知のとおり、粉本とは「本来は東洋画における画稿のことをいい、胡粉を用いて図様の大略を定めたり、墨描の上から胡粉を塗り画稿の修正を行なったことから、こう呼ばれたと考えられる。広くは画稿類のみでなく、模写本や写生帳なども含む」（『日本書誌学辞典』「粉本」）。その効用は「先ず画学の基礎的な習練」「運筆や用墨、ときには賦彩を修得するために、先人の下絵や古画の模写本を後進の塾生が徹底して写しとる」もので、「制作に当たって、図様を構想する際の参考資料となる点」が重視され、和漢の諸画の粉本が蓄積されてきた（武田恒夫『狩野派絵画史』吉川弘文館、一九九五年初版）。夙に橋本雅邦は、木挽町画所の粉本の多くが古画模写本であったことを紹介している（『木挽町画所』『國華』第三号、明治二十二年）。粉本群は「失われた原画の図様や大筋を

把握する上で、得難い資料を提供してくれることで、その効用が評価されはじめて」おり、東京国立博物館をはじめ、諸所に伝存する粉本の調査研究が進められた（先掲『狩野派絵画史』）。

しかし、研究の中心はやはり本画に傾き、粉本をめぐっては本画に寄り添う個別の事例研究の範囲に留まる一面があったことも否めない。これらのデジタル画像の公開も緒に就いた段階である。多種多様な粉本群を総体として捉え、多角的な観点から調査研究を進めるとともに、高度な検索機能を備えたデータベースを構築することにより、新たな視座を見出すことが期待される。そのパイロット的な試みとして着目されたのが、伝来が明確であり、和漢の画題を豊富に含む同コレクションであった。

この粉本類にはしばしば絵師名が書き入れられている。多くは麻布一本松家の狩野休清実信（一八〇九～六二）と休圓玉信（生没年不詳）父子の名である。そのため、制作年代はおおむね弘化頃から安政年間（二八四四～六〇）と考えられている。また、コレクションには橘守国の『唐土訓蒙図彙』や『増補頭書訓蒙図彙大成』『絵本直指宝巻』など若干の版本も含まれている。これらが休清・休圓らの所蔵本であったとは即断できないものの、「狩野派の門外不出の粉本を公に刊行して狩野派から響きをかかったという逸話をもつ橘守国作の版本を当の幕府御用絵師が所持して絵画制作の参考としていたとすれば、非常に興味深い」とも指摘される²。

なお、麻布一本松狩野家資料は、千葉市美術館に約一八〇点が分蔵さ

れている。同家の後裔にあたる狩野静子氏よりそれらが寄贈されたのは、二〇一一年度のことであったという。そのうち、五〇点弱が同館の新収蔵作品展「画人たちの一万時間」写生、下絵、粉本類を中心に「」において紹介された（二〇一四年一月二十五日～三月二日。千葉市美術館ニュース「C'n」69、二〇一四年一月。<https://www.ccma-net.jp/publications-goods/cn-69/>）。書き入れ等から推して、東京藝大本のツレであった粉本も含まれている可能性がある。

これらの粉本は、幕末明治期の御用絵師の活動を具体的に伝える好資料でもある。そこには、文字資料のみに拠っては見出せない時代性を読み取ることもできよう。本稿では国書データベースで公開された粉本から、ごく一端を紹介してみたい。

二、粉本が物語る時代―ハリス謁見の図―

安政四年（一八五七）十月二十一日、アメリカの外交官、タウンゼント・ハリスは大統領の親書を携えて江戸城に登城した。その日記には、当日の服装や謁見のさまが詳細に書き留められている。

私の服装は、国務省で定めた型による金で縁取りした上衣と、幅広い金線が脚部を縦に通っている青色のズボン、金色の房のついた上反り帽、真珠を柄に嵌めこんだ飾剣であった。ヒュースケン君の服装は、海軍の通常服で、それに海軍の制刀と上反り帽をつけた。

(中略) 私は、ついに謁見の時刻が到来したことを知らされた。私は、同じ場所に沢山の彫像のように静坐している気の毒な大名たちの傍を通った。そして、彼らの前列までいったとき、その列の前を通って、彼らの右翼へ向って進み、そこで立ちどまった。信濃守は、その場に平伏した。私は彼の後に立ち、ヒュースケン君が私の直ぐ背後に控えた。(中略) 謁見室の入口に立っていたヒュースケン君は、このとき大統領の書翰をささげて、三度お辞儀をしながら、前へ進んだ。(中略) 私はその箱を閉じ、絹の覆紗(六、七條の紅白の縞のある)をかけ、そして、それを外国事務相に手渡した。(ハリス『日本滞在記』、一八五七年十二月七日(安政四年十月二十一日)条。坂田精一訳、岩波文庫、一九五四年)

通訳兼書記としてハリスに同行していたヘンリー・ヒュースケンも、日記を残している。彼らが謁見の間に向かう際には「二人が先導し、信濃守がそれに従い、次に大使、それから私が、アメリカの国旗に包んだ大統領の書翰を持ってつづく。われわれの進む右手には式服をまとった廷臣たちが大勢(六、七百名も) ひざまずいていた」という(青木枝朗訳『ヒュースケン日本日記』、一八五七年十二月七日(安政四年十月二十一日)条。岩波文庫、一九九一年第四刷)。

興味深いことに、麻布一本松狩野家資料にはこの謁見の折の様子を描いた粉本が二点含まれる。

第一は表紙に「唐人体操之圖及遊獵之圖 安政四年來朝米使肖像 合

巻」と打付書がある一本で、紅白の覆紗をかけた書翰の箱を捧げるヒュースケン、金糸で縫取を施した服を着用したハリスと、彼ら先導する下田奉行、すなわち井上清直(文化六・一八〇九年〜慶應三・一八六八年)の三名を描く。図中には以下の書き入れがある(図1・所蔵者整理番号AZ329)。

安政四丁巳年十月廿一日出来登城 雅信公地取 安政巳四年十一月廿七日 休圓写之

通詞／ヒウスケン

亜米利幹使節／トウンセントハリス

下田奉行／井上信濃守

すなわち、この図は木挽町狩野家の最後の当主となった第十代雅信(文政六年・一八二三〜明治十二年)の地取、即ちスケッチを、一本松家の休圓が写したものである。雅信は天保十五年(一八四四)、父とともに江戸城本丸御殿障壁画の制作に従事するなどすでに実績を有し、翌弘化二年(一八四五)には法眼に叙せられている。図にはハリスが佩いていたという飾剣は描かれておらず、使節たちが手にする上反り帽に金色の房がついていないなど、日記の記述とは若干の齟齬があるが、ハリスの表情は現存する写真の面影と通うところが見られ(Library of Congress Prints & Photographs Online Catalog ほか)、幕府にとつての重大事案であったことから、命じられてこの場に臨み、地取を行った可能性を考

えてよいだろう。

この粉本には同図に続いてもう一図、ハリスのみを描いた地取が貼り継がれており、以下の書き入れがある。こちらは狩野中信の地取（スケッチ）を、同じく休圓が写した一枚である。

安政四巳年十月廿一日中信地取

亜国使節 六十才余二
見ゆ

安政四巳年十一月廿六日夜 休圓写之

中信は文化八年（一八一）生、明治四年（一八七）没、木挽町家の栄信の五男で、奥絵師の浜町狩野家に迎えられて第八代を継いだ。弘化元（一八四四）年には法眼に叙されている。近年、中信筆「富士飛鶴図」（富士山世界遺産センター蔵）が將軍家茂から米國大統領へ贈呈された一幅であったことが指摘されるなど、その活動ぶりはお明らかにしつつある（『静岡新聞』二〇二二年一月二十一日。「富士山 芸術の源泉」展・二〇二三年二月、『國華』1529ほか）。

さらにもう一点、「屏風杉戸小襖下繪 別二安政四年寫 亜國使節圖 袍葉」と打付書のある一本にもハリスの姿が写されており、「安政四巳年十月廿一日地取」「亜国使節六十才余二
見ゆ」の書き入れがある（図2・所蔵者整理番号 AZ302）。

謁見を記録した幕府側の文書類には「御用掛」等の文言は見えるものの、具体的な絵師たちの名は見当たらない。『維新史料綱要』卷二（東

大出版会、一九八三年）などには雑記類の記事も収集されていることから、なお精査を要するが、「御目見御次第書」（『大日本古文書』）には列座した中に法印法眼の医師、御用懸の面々一同等と書き留められるのみである。ハリス一行は下田奉行に引率されて謁見の間へ向かったという。

御目見就被 仰付、溜詰、牧野備前守、松平和泉守、御譜代大名、同嫡子、高家、鴈之間詰、同嫡子、御奏者番、同嫡子、菊之間縁類詰、布衣以上之御役人、法印法眼之医師登城、一出仕之面々直垂狩衣大紋布衣素袍着之、

一下田奉行使節召連登城、通弁官者、大手下馬にて令下駕、使節は下乗橋外にて下駕、役々附添、下田奉行令案内、御玄関階上江、大目付一人御目付一人出迎、一揖之後令案内、使節は、殿上間下段御襖之際北向ニ罷在、通弁官ハ同所西之方御張附際ニ在之、何れも椅子設之、令着之、下田奉行差添罷在、書簡は台に載之、使節之脇に置之、

一御用懸之面々一同出席及挨拶、

一出御以前大目付御目付案内にて使節殿上間より大広間御車寄之際仮扣所江相越、書簡ハ通弁官持之相従、此所えも椅子設之、下田奉行差添罷在、大目付御目付は、二之間板縁に着座、

（『大日本古文書』）

右の記録が伝える内容、たとえばハリスらが江戸城へ入る橋上で駕籠

から下乗を求められ、殿中には椅子が用意されていたことなどは、彼らの日記の記事と符合する。

さて、いよいよ將軍が出座すると簾が巻き上げられ、御側衆や太刀の役が後座についた。出仕者の列座は以下のとおりで、ハリスらは下田奉行に先導されて二之間板縁に控えた。

一 御下段西之方上より一疊目通より、松平讃岐守、井伊掃部頭、松平越中守、松平民部大輔、松平宮内大輔、酒井雅樂頭、牧野備前守、松平和泉守、順々着座、

一 御中段西之御縁類に、若年寄、拝後座二伺公無之御側衆着座、

一 御下段西之御縁類二疊敷之、高家列居、

一 南板縁次ニ、諸太夫之鷹之間詰、同嫡子、御奏者番、同嫡子、菊之間縁類詰、同嫡子、番頭、芙蓉之間御役人列候、

一 二之間北之方二本目柱之辺より御襖障子際、東之方四品以上之譜代大名列候、

一 二之間ニ諸太夫之御譜代大名、同嫡子、三之間ニ布衣以上之御役人、法印法眼之医師列居、

一 出御之節ニ至、大目付より下田奉行江会釈有之て、下田奉行使節召連、二之間板縁ニ扣在之、書簡は、通弁官持之、引続て罷在、

使節一行はさらに下田奉行に先導され、謁見の場に臨んだ。將軍が退座すると、再び下田奉行の案内で一行も退座した。

一 備中守

御前を伺、使節可差出旨御奏者番大目付江会釈、大目付より下田奉行江解釈、于時披露之奏者番、御下段下より二疊目東之方江罷出、下田奉行使節召連罷出、御下段御敷居板縁ニ着座、使節御下段下より二疊目江罷出拝礼、通弁官は書簡を持板縁ニ罷出、此時重墨利加大統領使節より披露、使節御下段下より四疊目にて又拝し、御下段上より三疊目江進謹拝、大統領より之口上申上、畢て一拝、

上意有之、于時通弁官書簡持出、使節え私し板縁え退、備中守座を立、書簡請取之復座、謹拝、

御会釈有之、使節最前之通御下段より四疊目二疊目にて謹拝て退去、下田奉行差添、大目付御目付令案内、御車寄仮扣所え退去、此間若年寄一人西之御縁類通御下段え罷出、備中守より書簡請取之、西之御縁え退座、奥右筆組頭え渡之、相済て御間之御襖障子開之、御下段御敷居際立御、御譜代大名其外一同、御目見相済て入御、

一 入御以後大目付御目付令案内、下田奉行差添、通弁官殿上間え退去、一重て使節通弁官、大広間御車寄仮扣所え、大目付御目付令案内、年寄共大広間二之間御襖障子際東向ニ順々出席、三之間北之御敷居際え、御奏者番一同出席、南之御敷居際え、御用懸之面々一同出席、何れも立罷在、其後大目付御目付令案内、下田奉行差添、使節二之間御敷居内え罷出、通弁官は同所御敷居外ニ罷在、

これに続いて下賜の品々や老中の挨拶、御用懸ら出仕の面々の退散が記録されるが、やはり絵師に関する記載はない。

しかし、麻布一本松狩野家に伝わった地取の粉本は、米国使節の將軍謁見という一大事に際し、狩野派の奥絵師たちが指示を受けて記録を残したことを物語っている。いみじくもハリスは、

私は殿中の式服について記したいが、それを人が理解しうるように表現することは、言葉の力だけでは到底できない。それを明らかに理解するためには、絵に描くことが絶対に必要である。(先掲日記)

と書き残したが、幕府側でまさにその役割を担っていたのが狩野派の奥絵師たちであった。

『大日本古文書』の対外関係史料四九「安政六年十月頃、老中書取、大老井伊直弼掃部頭宛」によれば、ハリス謁見の際、「御目見之節絵図面」が制作されている。

覚

昨日持帰候重墨利加ミニストル

登城

御目見之節絵図面、明朝持出事

(対外関係史料四九)

この「絵図面」は着座の具体等を記したものかと推測され、先掲の地取そのものとは言えないとしても、幕府側で一連のビジュアルな記録が制作されたのは確実である。むしろ当然といってもよい。このような記録保存という営為の中に、雅信や中信による地取も含まれていたと考えるべきであろう。

三、享受される地取―狩野芳崖・三島中洲・護城鳳山―

さらに注目しておきたいのは、雅信地取の一図は、雅信の弟子である狩野芳崖も寓目していたことである。

安政四年(一八五七)十一月、芳崖が岳父の田原俊貞に宛てた書状には、ハリスの謁見に関する伝聞とともにその場面が描かれている。麻布一本松家本と構図はやや異なるが、同一人物が三名、図中には「使セツ」「通使」「下田奉行」「先生様御縮図如此御座候」の書き入れがある(関千代「研究資料 狩野芳崖の書状―十一月六日(安政四年) 付―」『美術研究』三一一号、一九七九年三月。東京藝術大学美術館・下関市立美術館編『狩野芳崖 悲母観音への軌跡―東京藝術大学所蔵品を中心に―』、芸大美術館ミュージアムショップ、二〇〇八年)。

関論文の時点では、

勝川院の縮図が如何なるものであったか、現在それを見る術もないが、いづれにしろハリスの容貌における酷似性、服装の記録との一

致等を考慮すると、殿中で一行を目撃しての写生と考えるのが妥当であろう。(中略) 勝川院の列坐は、記録の中には書き止められていない(中略)内々の登城が許されたと見るべきなのであろうか。

と推測されているが、芳崖が目にした「先生様御縮図」なるものの実在は、少なくとも麻布一本松家本によって確認されたことになる。ハリス謁見の図といえ、黒船館(柏崎コレクションビレッジ)所蔵の一枚がよく知られるが(図3)、麻布一本松家本はこれと異なる図様を持つ新たな一本として注目されるのみならず、芳崖の伝記研究にとっても有益な資料であった。

加えて、東京大学史料編纂所はこれらと酷似するハリス謁見の図が所蔵されている。一点は「ハリス、ヒウスケン、井上信濃守ノ図」(貴重書・維新史料引継本・Iリ-2069)、もう一点は九条公爵所蔵本の模写「亜米利加人登城大目付下田奉行案内図」(貴重書・模写・波1-88)である(図4、図5・https://ciom.ghu-u-tokyo.ac.jp/viewer/list/ldata/0M0/_103ha/166/?m=limit)。

前者の構図は麻布一本松家本と等しく、下田奉行の装束の色や、あしらわれた井桁紋なども一致する。ただし人物の風貌はかなり異なり、また、ハリスは剣を携えている。とりわけ、下田奉行の面貌に茶色の染みが点々と描き込まれている点は目を引く。後述するとおり、この染みの表現は他本と共通する特徴である。

維新史料引継本は、明治四十四年、明治維新に関する史料の収集と編

纂を目的に文部省内に設立された「維新史料編纂会」の旧蔵本であって、昭和二十四年に編纂会が史料編纂所に吸収された際、引き継がれたものである。寸法は縦二七・二cm、横三八・八cm、画中に「通詞／ヒウスケン」「亜墨利加使／トウンセントハリス」「下田奉行／井上信濃守」と書き入れがある。使節の服は灰色で輪郭を描き、目に薄く金泥を施す。ハリスの上衣の縁には金泥でS字が連なるような文様が描かれ、上から墨が塗られている。この文様は麻布一本松家本と近い。本紙右上には史料編纂所印と思しき朱の陽刻長方印、左下に維新史料編纂会の朱印が捺されており、本紙ウラには昭和二年十二月七日、維新史料編纂会がこれを購入したことを示す受人印がある。

付属の包紙には「奉奠／鄙草／三島毅再拜」と墨書されている。三島毅とは三島中洲(天保元・一八三一年〜大正八年)であろう。漢学者にして法学者、二松学舎大学の創始者としても名高い。包紙の折幅と史料のそれとが一致するところから、現段階では本来の付属品と見做しておくが、中洲が自ら絵筆を執ったのかどうかは分からない。あるいは、この図に伴う詩文を認めた一紙が添えられていたのかも知れない。中洲はペリー来航の際には現状を実見し、記録している(『探辺日録』)。そのような関心のありようと中洲の通常の表現手段を考え合わせるならば、中洲がハリスの謁見についても関心を寄せ、詩作した可能性については一考の余地がある。いずれにしても、この図様の源流は雅信ら狩野派の奥絵師たちの地取かと推測されるのであり、こうした図を閲覧・入手できる官立組織を通した粉本享受を窺わせる。

もう一点の九条公爵本（模写）は卷子一卷、題簽に「亞米利加人登城大目付下田奉行案内圖書／東京市／公爵九條道秀氏所藏」と墨書する。寸法は縦三一・八cm、横九八・五cm、本紙寸法は縦二八・一cm、横五四・五cm。構図は黒船館本に酷似し、先頭に大目付、最後に通辞を加えた計五名を描く。人物の面貌は黒船館本とは大きく異なるが、下田奉行の顔に多くの染みを描く点は、維新史料引継本とも一致する特徴である。裏書（縦一三・九cm、横四・三cmの墨書紙片を貼付）によれば、本図は九条公爵道秀（明治二十八年～昭和三十六年）の所蔵品で、昭和八年に護城鳳山が模写した一本である。

東京市 赤坂區福吉町公爵九條道秀氏所藏

亞米利加人登城大目付下田奉行案内圖

昭和八年四月中旬 護城鳳山模（落款・○・八cm方印）

右にいう「護城鳳山」は明治十年の生、同三十八年に東京美術学校を卒業し、同四十年には文科大学史料編纂掛を嘱託せられて、帝国絵画協会東台画会の会員も務めた画家であった（東洋絵画協会編『現代画家名鑑』、大正三年）。「古画模写の主任として精励恪勤の聞えあり、史料を

渉獵する傍ら、有職故実を研究して、その蘊蓄の深きことは吉川靈華、松岡映丘と比肩するに足るものがある。また俳句俳画を能くする」とも評されており（『日本画大成』二八、東方書院、昭和八年）、「大正五年度帝国絵画番附」の「東京之部優秀画家」や、「（大正11年調）全国絵画

優秀作家名鑑」等に挙げられる。『未刊・坪内逍遙資料集』二（逍遙日記大正九年―大正十一年・葛の葉第四号―第六号・延葛集第一号、逍遙協会編、二〇〇〇年）によれば、大正十一年八月六日、逍遙のもとに鳳山が依頼の絵画を収め、金三十円の報酬を得るなどしたという。

鳳山は史料編纂掛として、数多くの肖像画などの模写に携わった。一例を挙げれば、武田流軍学全書刊行会はさまざまな図様が伝存する「武田信玄像」の選定に苦慮し、「杜撰を以て後世を惑はさんよりは新に根拠ある考證に本き新製するにしかず」と判断し、渡辺世祐の指導のもと、鳳山に新製を請うてその作を掲載した（『武田流軍学全書』、昭和十年）。鳳山はこうした模写事業に従事する中で、九条公爵本のそれも手がけたのであつたろう。

維新史料引継本、九条公爵本（模写）、黒船館本、これらの先後関係はにわかに決しがたいけれども、黒船館本以外の三本は下田奉行の装束を薄香色で彩色し、ハリスの上衣には小さな円が連なるような金の縁取りを描いている。ヒュースケンはその日記に「式服をまとった廷臣たち」の衣裳は「薄黄色」であつたと書き残していることから、少なくとも下田奉行の装束を藍色に彩色し、ハリスの上衣の縁取りを格子柄に描く黒船館本は時代が下ると思う³。

われわれの進む右手には式服をまとった廷臣たちが大勢（六、七百名も）ひざまずいていたが、その衣裳は、頭のてっぺんにちょこんと載っている四角い漆塗りの被りものと、非常に幅の広い袖のつ

いた、淡黄色の麻の着物からなっていた。そのゆったりした袖には紋章がついている。プロテストントの牧師のラバトのように結んだ白絹の帯を巻き、反りのある片刃の剣を佩^おびている。このときは一本だけであった。彼らはズボンをはいているが、それは脚の長さの二倍もあって、完全に足が隠れ、余った部分は後方に引きずっている。膝で歩くような格好に見える。多数の廷臣が集まっているのに、きわめて深い静肅がその場を支配していた。

〔ヒュースケン日本日記〕

九条公爵本と黒船館本は、異国人風に誇張された表情や、ハリスが帽子を右手に掲げ、軽く会釈するかのような挙措で描かれた点など、どこかボンチ絵やトバエを連想させる雰囲気がある。「通辞」の語がヒュースケンではなく幕府側の人間に添えられているのも、すでに「地取」の域から離れ、制作年代が下ることを思わせる。

このように粉本を起点に辿ってゆくと、幕府の御用絵師たちが障壁画や海外への贈呈品も含めた美術調度品などの制作に留まらない、本画の制作を想定しない記録保存・メディアとしての役割を担っていた具体相が浮かび上がってくる。^④時代を写す絵師と粉本との交点には、幕末維新期の海外交流史、人とモノのネットワークを考えるための新たな端緒が拓けている。

三、粉本が物語る画囊―導引図・錦絵への回路―

「唐人体操之図及遊獵之図 壺巻」には、ハリス謁見の図に加えて「唐人体操之図」なるものも貼り継がれている(図6)。そこには座してさまざまなポーズを取る中国風の人物七名が描かれ、図中に「自適筆」の書き入れがある。自適斎とは狩野探幽の弟、尚信(慶長十二・一六〇七―慶安三・一六五〇)を指す。

この図は一見、確かに体操図のようにも見えるが、その源流は恐らく帛画「導引図」(湖南省長沙市馬王堆前漢墓紀元前一六八年前の導引図)にまで遡る、いわゆる按摩法の図であって、ここに写されたのはいわゆる導引図「八段錦導引法」である。多くの版が伝存するが、たとえば明宗五年(一五五〇)刊の『活人心法』二巻、また、承応二年(一六五三)刊『醒僊活人心法』、正徳三年(一七一三)刊『導引体要附録』二巻(喜多村利旦、京都大学富士川文庫蔵)等がある(図7)。いずれも第一図から第八図まで、導引の注釈とともに具体的な挙措が図解されている。麻布一本松家本はこれとは掲出順が若干異なり、第三図は人物の向きが逆になっているが、書き入れに従えば、承応二年版は尚信の没後であり、尚信らが朝鮮版や明版を受容して導引図を写した可能性も視野に入ってくる。

この八種類の導引の図は後々まで受け継がれた。延享四年(一七四七)刊の国立国会図書館蔵『医道日用綱目』(図8)には「壽保按摩法」の

呼称で近似する図様が図示される。さらに時代が下ると、唐人は和風に変わってしまう。弘化二年（一八四五）刊の九州大学医学図書館蔵『医道手引艸』を例示しておこう（図9）。

池田隆二「徒手体操について（その1）18世紀以後の思想と実践を中心に」（『中部工業大学紀要』第二集、一九六六年十一月）によれば、「八段錦導引法」は代表的な導引法の一つであり、導引が運動へ転換するのは文政天保頃ともいう。麻布一本松家本が「体操之圖」と記すのも、こうした時流と呼応している。

運動が養生法の重要項目となる導引から運動への転換期はだいたい文政天保の頃とみてよい。近世の導引に引用された大陸の導引法の重要なものは華佗五禽戲、八段錦導引法、彭祖の導引、老子導引法、天竺按摩法、十八羅漢導引法、婆羅門導引十二勢、巢氏導引法、陳希夷二十四坐功法等がある。（中略）（五禽は）明治に入ってからも小学校教科書にも引用され現在小学校低学年でも模倣（方法）遊びの形としておこなわれている。又八段錦導引法は「導引体養附録」として正徳年間に刊行され八種目のすぐれた導引法の意味であり中国の幼真道士の作で明の陳希夷と高廉が註を加えたといわれているが確かではない。八段導引法は大別して坐位と立位でおこなうものがある。（中略）総じていえば坐位の方は純然たる医療体操として発展したものであり立位のものとは護身術として拳法から発展し養生法にも利用されるにいたった。

これらさまざまな導引図の出版や、唐人から日本人への図様変容の背景には、養生法の隆盛と、その書物が歓迎された時代性がある。⁵⁾

翻って、麻布一本松家本の「唐人体操之図」は、伝統的な唐人のすがたで導引図を描いていた。このような実用的な医書を御用絵師が写したのは、いずれ献上本を制作するための手控えであったのか、自身の画囊に入れる画学であったのか。同様の事例を蓄積する中で、なお検討してゆく必要がある。

最後にもう一点、麻布一本松狩野家資料から「縮図帖」に収録される「十二支一牀」を引いておこう。書き入れによれば狩野融川筆と伝える一図で、十二支が一体として表現されている（図10・所蔵者整理番号AZ270）。

狩野融川寛信は安永七年（一七七八）生、文化十二年（一八一五）没、奥絵師である浜松狩野家、狩野閑川昆信の次男である。寛政四年（一七九二）に家督を継いで奥絵師となった。文化五年（一八〇八）には法眼に叙せられるが、自らが制作した朝鮮贈呈屏風に対して老中から工夫の不足を指摘されたことに憤激、文化十二年、下城の途中で切腹して果てたという。いまだ三十八歳であった。

この「十二支一牀」と酷似するのが歌川芳虎（生没年不詳）の大判錦絵「家内安全ヲ守十二支之図」（安政五・一八五八年）である（図11）。こちらは子（顔）、丑（角）、寅（背の文様）、卯（耳）、辰（火炎）、巳（尾）、午（たてがみ）、未（髭）、申（後ろ足）、酉（鶏冠）、戌（前足）、亥（背の毛並み）から成る。

さらにこの錦絵を溯る例として、嘉永年間（一八四八～五四）頃、遠浪斎重光によって制作された浮世絵「寿と云ふ獸」の存在が指摘されている（太田記念美術館・日野原健司 <https://otakinen-museum.note.jp/n/170d02cc374d> 図12・ポストン美術館）。

麻布一本松家本の書き入れに従うならば、「十二支一駄」は芳虎の錦絵を溯る作例ということになる。首や項の辰らしい表現や、午に見立てたてがみの位置、控えめな尾のさまなどは「寿と云ふ獸」の方に近い。しかし、柔らかな印象のたてがみや、腰に生える硬そうな直毛との描き分けは、腰の毛が亥のものであることをより明確に表現し得ている。前後の脚は「寿と云ふ獸」とは逆であり、臀部に朱が指してあるのはなかなか芸が細かく、いかにも「申」にふさわしい。めでたき白鼠の顔はより愛らしく、つぶらな瞳で前足を揃え、ちょこんとかしこまって座る風情は芳虎や重光描く立ち姿とは異なり、祝言性と愛らしさが際だっている。あるいは浮世絵などを参考に融川が一工夫を加え、一幅に仕立てて献上すべく企図した図でもあったろうかと、想像を巡らせたい。このような図様がどこから発し、どのように錦絵の世界と呼応し、活用されたのか。現段階ではその足跡を辿ることは難しいが、それだけに粉本の存在は重要であるといえよう。

もとより粉本には本画との交渉を伝えるものが数多く、その比較研究は重要課題である。その一方で、見てきたように粉本は記録資料としても重要な位置を占めている。幕末明治期の表象・出版文化との往還も見逃せない。本稿ではそのような観点からごく一端を例示してみたに過ぎ

ないが、粉本群からは確かに時代を写し取る絵師たちの営為が読み取れるのであり、その目的や多方面の資料群との交渉のさまが浮かび上がってくる⁶。粉本は分析の難しい一面も有する資料群であるが、いまだ手つかずの研究資源とも評し得る。多様な専門分野の知見に基づく本格的な分析が俟たれるところである。

〔注〕

（1）「麻布一本松狩野家資料に関する画題の国際化のための基盤研究」による。本研究は歴史的典籍NW事業の国際共同研究「画像に紐づくメタデータ生成に関する共同研究（二〇二一～二〇二三年度）」の一環として、東京藝術大学大学美術館と協定を結び、デジタル画像の作成と国際共同研究を並行して遂行された。同館の古田亮教授には本研究の発案と格別のご指導を賜り、オブザーバーとしてご参加下さった田中圭子助教、曾田めぐみ氏にも大変お世話になった。研究成果の一部は二〇二三年十二月五・六日に同美術館の研究展示として発表され、これを承けたリーフレット「粉本を読み解く」麻布一本松狩野家資料への多角的アプローチ」を二〇二四年三月に発行予定。なお、本稿の一部を改稿し、同展示で発表し、リーフレットに収録した。

（2）松嶋雅人「江戸狩野・表絵師とその御用―東京芸術大学所蔵 麻布一本松狩野家資料をめぐる―」（『東京藝術大学美術学部紀要』三四、一九九九年五月）。

(3) 黒船館本には料紙右上に「安政四年丁巳十月二十一日／亜墨利加使節登／城殿上間ヨリ大廣間江／御目見之節輩礼トシテ大廣間／武者マト前御廊下通行或増／如図」と墨書がある。このもとなつた絵画資料の存在を思わせる。『特別展 ペリー&ハリス／泰平の眠りを覚ました男たち』（東京江戸東京博物館、二〇〇八年）、『図説 横浜の歴史』（横浜市市民局情報室広報センター、一九八九年）など参照。

(4) 公的に仕える絵師がさまざまな記録に携わったことは、災害図の制作と出版などにも見出すことができる。たとえば、大坂町奉行所の御用絵師であつた吉田作治郎（大岡尚賢）は摂河水損図の制作に携わつていた。鳴海邦匡「近世の大坂の地図に関するノート」（『待兼山論叢（日本学篇）』四〇、二〇〇六年）、島本多敬「19世紀初頭の災害図出版における書肆の役割―1802年淀川水害の事例から―」（『人文地理』第七一卷第一号、二〇一九年七月）など参照。

(5) 塩満勝磨「導引・按摩の歴史的考察」（『武庫川女子大学紀要』18、一九七一年九月）、李強・大形徹「中国按摩推拿医学の歴史 その一」（『人文学論集』34、二〇一六年三月）、片渕美穂子「近世日本の養生論における導引術―その技法の整理―」（『養生学研究』一〇一、二〇一六年）など参照。

(6) 麻布一本松狩野家資料のうち、西王母を描く一本（所蔵者整理番号AZ76、デジタル画像TKGM181）は顔の部分に貼り紙があり、本紙には柔らかな表情が、その上に貼られた小紙片に

は少し眉を寄せた表情が描かれている。本紙の表情は、同コレクションの「滑稽佛画」（所蔵者整理番号AZ301・<https://doi.org/10.20730/100409654>）の西王母のそれに通うところがあり、桃の描き方などもよく似ている。襟元に薄い青地に円形の文様を描くのは西王母図の型であり、探幽の甥にあたる常信などもこれを描いているが（板橋区立美術館蔵「西王母図」、「滑稽佛画」と同趣の「戯画図巻」が探幽周辺に発するであろうことを思い合わせると、粉本間の比較検討を通して、狩野派で描き継がれた故事人物画の展開や、画学との関わりが見えてくる。なお、この西王母図には書き入れがあり、「探幽斎本畫」「實信摹／絹地二而／探幽筆三幅對／中西王母左鉄拐／右蝦蟇／弘化二己仲秋寫」という。ほぼ同文の書き入れを持つ「蝦蟇」「鉄拐」図が千葉市美術館に所蔵される（「探幽斎筆／守信（描朱文瓢印）／三幅對 右蝦蟇 中西王母 左鉄拐（蝦蟇）」「探幽斎筆／守信（描朱文瓢印）／三幅對 左鉄拐 中西王母 右蝦蟇 實信写」）。ツレであろうか。西王母、蝦蟇、鉄拐の組み合わせの所発も検討を要する。

【付記】 貴重な所蔵資料の調査・掲載をご許可賜りました東京大学史料編纂所、黒船館に心より御礼申し上げます。本稿は「麻布一本松狩野家資料に関する画題の国際化のための基盤研究」および科学研究費補助金・基盤研究（B）23H00608（研究代表者・齋藤真麻理）の成果の一部である。



図1 「唐人体操之圖及遊獵之圖／安政四年来朝米使肖像」 <https://doi.org/10.20730/100409682>



図2 「屏風杉戸小襖下絵／別二安政四年写西国使節図」

<https://doi.org/10.20730/100409655>



図3 黒船館蔵「亜米利加使節ハリス登城の図」



図4 東京大学史料編纂所蔵「ハリス、ヒウスケン、井上信濃守ノ図」(維新史料引継本-Iリ-2069)



图5 東京大学史料編纂所藏「亞米利加人登城大目付下田奉行案内圖」(模写 - 波 -166)

https://clioimg.hi.u-tokyo.ac.jp/viewer/list/idata/0M0/_103ha_/166/?m=limit



图6 「唐人体操之圖及遊獵之圖／安政四年来朝米使肖像」



図 7-1 『活人心法』(朝鮮明宗 5 年慶州府刊本・東京大学学術資産等アーカイブズポータル
<https://da.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/portal/assets/8c1bf52c-7090-9250-a10b-2709365755e8>



図 7-2 承応 2 年 (1653) 刊『麗僊活人心法』(早稲田大学・古典籍総合データベース
https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ya09/ya09_00376/index.html



図 7-3 正徳 3 年 (1713) 刊『導引体要附録』2 卷 (喜多村利旦・京都大学富士川文庫蔵)
同大学貴重資料デジタルアーカイブ <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00004301>



図8 延享4年(1747)刊『医道日用綱目』「壽保按摩法」(国立国会図書館蔵)
<https://doi.org/10.11501/2536815>



図9 弘化2年(1845)刊『医道手引』(九州大学医学図書館蔵)
<https://doi.org/10.20730/100259635>



図 10 「縮図帖」より「十二支一卦」 <https://doi.org/10.20730/100436750>



図 12 遠浪斎重光「寿と云ふ獣」
An Auspicious Beast (Ju to iu jû);
The Twelve Precepts (Jûni kyôkun)
(ボストン美術館)
<https://collections.mfa.org/objects/462161>



図 11 歌川芳虎「家内安全ヲ守十二支之図」
(太田記念美術館蔵) 安政 5 年 (1858) 6 月
大判錦絵
<https://otakinen-museum.note.jp/n/n170d02cc374d>

